竹園抄

伊地知文庫
文庫20
293

伊地知氏書冊

文庫28
293

抑そもそもこの人せいかの名字
るものこれ作の系のかたちく
なるべし所詮八市とは物ごと
も物知せる家とかたく

一 初めきこゝろ病しし事
二 何不對正べきこと
三 親族の勾ひ事
四 六義をこゝろつたへ
五 本こゝろをくらむへき事
六 こゝろはくすべきこと
七 乱ゝこゝろ事

宝玲文庫

八懐紙かくしたるもの
九接待の儀式の事
十名の物の紙印こうるしたるもの
十一侍紙しる事

一三の病くるもの　左人打ちくさ
くさ病　名代行ちかたゆる四病
八病七病八懐ホ之　三紙之病
六首を題

一同詞病　二同字病
四風体病　又作紙病

一同詞病を一句の中に同じ打ちたる
て年よりたる
那波清しさくやけ冊みあり

△

八月廿三日の月さくさくたる井
井月くさくやけ冊みあり　三ホ之
むしのこゑかくも仕ら也を代ると
ほ仕ら仕ら冊白ト云ふ号あるとれハ
月ハくさくさくさくさくさくさ
冊ちくさくさくさくさくさくさ
雪をハくさくさ風をハくさくさ利
白雪の雪をハ同詞ハ冊ハ
白くさくさくさくさくさくさ
くさくさくさくさくさくさ
月詞の本くさくさくさくさくさ
きくさ上白　計　雪くさくさくさくさ

本に云詞二ツ有之かなし

二

同字の病ト云ハ一首の中に八月之字
のうち人聞よくきこえ
むさと見てく聞ゆる字なりさむきなとは
しくひとやうくさけりうるしきり
義をかんしくのてト嘗やうくのく
らしきしくきく
山ふかき秋とそ見ゆ由風やまかせや
不うに紅葉しにもやし
山そのうちをまつハらし聞よく
きこゆ上下れ句れ聞よくも一句
の内にくもてに次の如く字続乃

名詞の字のうくしも本に云傍慥へし
続の名詞指ハのうちとさへ八
しくひとしみえなるとき続えとれ
あまかくて云の書のうくれ
嘗れなりてんなれなれ聞よく

三

乱思病とは思ひなく作人なき之字
の心とふ開きくれ理も無之歌之
一首の道理にとまりなくてそ上一ケ
詞我か歌風へし是ハ理非きこえぬ
そこ面にあれらく一のうちあたへ
浮やのうい雲とめるこそてかねる
おもれつきへの秋の夕くれ

詞をはぶくれと道理聞きさ
ほど

○

其の夜れ[illegible]きけ[illegible]て
[illegible]横死しのこ
[illegible]れ[illegible]の病[illegible]
詞をいふ[illegible]この[illegible]
[illegible]井病れ
[illegible]

四

風傳の病ト云て[illegible]
[illegible]に[illegible]別の事[illegible]
[illegible]紙を月[illegible]して後初[illegible]
月故[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]この[illegible]

△

山[illegible]
[illegible]の心
[illegible]
[illegible]れ
後[illegible]白[illegible]
の[illegible]風傳の[illegible]
河院の御[illegible]懐[illegible]初[illegible]の
[illegible]房[illegible]ト云[illegible]
[illegible]

此言の心ハ風雅やさしく艶なるト
云ことなるべしこれも風情病の
これなるべし中の重ハ前に付仏而不
入日と云ハ稿として乗家なるらんと
讀る心ハ歌の句ゆへの心面白からず
作歌之病ト云ハ長頭して行方ハ
我もたハ歌人して深之心をたて
人の何やら深病之続し心得ト
名所し月ト云歌に
何しる病也や波也本なれや
所なるそ月も其ままにし
是ハ村上天皇之御製なるべし

作歌ト作るなるべし言之心ト云を
書なれ此月の心あかしといへらんハす
よろしからずして只ハ病ト聞えまじきなり
あるト云名所よく病也や波の
之前ハ心ハ月にす心有なくハ
沙しト讀るし又云鳥羽院ノ御母
頼政作歌にて云
月の菊ト歌なく
月影稲葉もみぢハ心して
むやみに見れしきみなくき
そも月のこと心なく月なれよこそ
なにとも世にも宗トまさるなし

[illegible]
そもそも后ト云フハ
下ノ方ヲトルモノ
ニシテ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
本ニ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ト云ヘリ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

對ス〳〵　おさ對彩（サウスイ）對トて二ツ
石對ス彩（ヲシ）彩ト彩彩彩彩　中ト
中ト彩彩彩彩ト〳〵ト〳〵ト彩
對ス彩之
中ノ〳〵
ゆ〳〵ス彩ス〳〵ス彩ス彩風ス
ス彩ス彩ス〳〵ス彩ス白石ス
さ〳〵ス〳〵ス彩ス彩ド云白石ス對ス
ス彩ス彩ス彩ス彩ノ彩ス彩ス上ス彩
ト云ス〳〵ト彩ス彩ト彩ス彩彩ス彩
月ス彩ス彩ス彩ス彩ス彩ス上
下ス〳〵ス彩ス〳〵ス彩ス彩ス彩ス

上三ツ下二ツの物あれて上下ス〳〵
彩して中彩彩彩ス彩彩彩彩彩彩彩
彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
久の彩て清彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
月ス彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
是て久彩彩彩月彩彩彩彩彩彩彩彩
彩彩彩ス彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
玉川の彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
是て中彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
ス月を彩ス彩彩彩彩彩彩彩彩彩彩
ヒト云ハ

[illegible]浦の胡蝶く
[illegible]船[illegible]
是ハ上白[illegible]の浦ト云[illegible]
白[illegible]
[illegible]又上白の初の五文字下
白の[illegible]
[illegible]中ノ上ハ[illegible]
年二ノ
梅の[illegible]久[illegible]
あ[illegible]原雪[illegible]
[illegible]ハ上ノ中[illegible]
く

[illegible]か[illegible]の
山の[illegible]
[illegible]ハ上ノ下ノ[illegible]
[illegible]又上[illegible]
[illegible]本ノ月[illegible]
下ル[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
月や[illegible]
[illegible]
是ノ月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ上ノ[illegible]

連ト云ハ又てもれ白れ移りのけき
のきれまるのそこうちはの気之
ほれふれおれもれ和ふるまれ之
きくくくくくく新てくさくゆん
是そほくきれくふふこうこの昔之
りとすくくそあくそさくくく
もとくくくく今の世くハくほ
ほれふれおれもれ云ハおのけき
くれ山くまなくくゆくて云て、のけき
きくくトてもれ和きくくくハ
新くふれきあるそるれあきき
くくそそくくくこの紙也井又白れ

△

浅きより深き躰の句ト云之二
まづは三躰の句ト云ハひとき浅くり
されとて詞のきりやうれを二首之
正称ヲ読ミては神をとかれねら
は二首之ごとくそし
うつの山路の内てもあるかし
花のあるれは錦かとそ聞ケ
吉野山ト云く景ト浅き桜ト
云く前と云ちるトて華ト告
の山の二首のとし三躰の句も二首之内ハ
万徳し中にも一之ぶハ義残九品也
又れうしと云ふとて山井くをそ

△

紅葉の錦也 又名所也 道ト云ハ
名所の中ハひろし浅くまくく
あしうらハ三の文云
朝霧（カスミ）とかゝる事も只であるく
ちりかれもゆし花のハして
朝の山の錦（こ）ゆしりとハ山こむ花も
の名所の内にも山ト云もみれ
思ひそのてトたられたとはたち
つくとれ名所之是ニ云一切ヲ浅く
読の句と云はそとくハひきも
通りても詞もきりそいはらし心の
はれれめるそし二のそ

そ八ちゝてあらはるゝ
ちゝてゐるなり
六儀小三秘の事
形之祓形乃二秘八大なる秘事
くるゆゝくきはまれる三ヒ儀也
云八風祓皆八秘須の上人之風
云秘くゝ高之而しくハあるゝきゝ八
ちゝれ秘くゝ云あゝゝて家
ゝ神之ゝ
孫波津ゝ云
今のそゝ書きてゆゝ
廿三のそ伊波天皇トゆゝ門ト宇治

れうさゝの文トゝ位をゆゝ
ゝて国くゝ王なゝ三十年之
先八ゆゝくの應永天皇れ
ゆゝるゝ秘ゝれ八分位
ゝゝゝ先ゝて結れ秘れ先
先ゝ秘くゝ位くゝ
れ八ゝて位くゝ秘
宮ゝ一の意秘屋ゝ自
伊波れ位くゝ
伊大臣ちゝゝ孫之孫波津ト八
伊波高れ名之ゆゝや上ゝ
ちゝ名位くゝ

よくはかなき事なれども心ざしあるト
きこしめしハ喜びしト也其義ト
云ハなにはづに此花咲くと云之以
一首ハ翁りしハ諂ふ仁徳しるをさ
聞こえてこそは仁徳しるを仰ぐ
一首ハ風の歌ト云之風ト調ふなり
其の文殊にあらず心にもとつあれ
て何となく風の歌そし思ひ斗

二

賦の歌ト云ハ一ツそして何事ほくさ
そへ歌ハ云るそしてなにはつのたより
一首之賦ト云心そしてなにはつの
よみ人しれず一ツそしてはつかしき

△

しかるに二首の
深くおもひなしたるのみのたとへ
かそへ歌ハつきせぬ心も深く
さる事よりなしたるゝみト云の心
見えつきト云るそし文選にも賦
の字をそへたるハ曲にまた頌の字を
深くおもひて文選よりの字に
の外文選と文記よりハ一首の字にて
ト云其字於書遠心ハ詩をなして
よみ人之一首ハ深くみト云
きこえて極つきト矢のハ
弁まれめでたし知れトよみ人知らず

二ハ人ヲ召ハレテ、くハなしくつれなト
ハ和し給ふ（もうしたまふ）ある執の事ハ世ハ
うしてヲ上ハ云ふもきれなもきれト
こいふもきトハ然程と云ふ人ハ言葉（ことば）字
ハもちゆ（ゆ）ふ人ハ云ふトハ云り然程（ホシノ）
のまゝ無業（ムゲウ）然程のまゝ
ヲ小ハもふハもハ一人ハ判ふこハ仏
こ皆の字ハ時ハ月ハもゆ
是ハ世トちゆるれ月ハ花
ちもハ仏世ハ世ハ世ハ内ハ多
のハ行ハ行ハを忘ハ伊勢物
語ハ世人ハいふ人ハと云字も

皆の字ハ明こ花ハ月ハ引馬（ヒバ）
物の無岸ハふハ年ハ世ハ
ふハトハふハ花ハ相知郡ハ草ハ
高ハ波ハを花と云ハ云ハ
於二年ハ長ハ表ハ形ハ世ハ
云ハ花ハと云ハ世ハ
花ハ病ハもハわハ
ハふハふハトハ云ハ世ハ
ハふハふハ花ハ三月ハ
ふハ花ハ立ハ又ハ
ハ二ハ物ハ
なハふハト

天のしゝ雲あり
はるゝきゝとしきゝやうゝん
朔の雲の雲と記と二ともたゝ
へたるとこゝ三ゝ八くもゝ公方記
は花月は富ゝたゝみるし眞
の三ゝ　四ゝ具ゝもたゝ立の
物はこゝ行ゝもゝとゝ立ゝも
又方別ゝ風は眞八ゝれもゝる
三ゝとゝ風ゝト人はたゝ八
ゝと雲は雲八ゝ具八ゝ似り
トゝるゝて立ゝも方別ゝ立
三ゝ云

我ゝ八ゝ立ゝ法ゝ海の
ゝるゝトゝこゝ雲はゝ
是小ゝ十一の風の心ゝたゝ立の
はゝもゝる白ゝもゝ立ゝ世
心は物ゝ毋ゝ八ゝ八ゝ
小ゝすゝ雲は具ゝもゝ
雲は雲ゝと云又義八
雲は立ゝ八小ゝ心ゝ立ゝ
云ゝ其三雲ゝ別ゝ立ゝ
ゝるゝとゝ立ゝ立ゝ
此ゝ心ゝ雲ゝ
はゝ立ゝ方ゝ

をも井とかなあるべきことなり
此の六儀祈の六儀と云のを祈四
雨乞 正し雅の二のと云ハ十しと
をもの為にも十ひとつ井とかく
り五ひとつ井の二のと中の三の
をるとおもふきせるとせハ
人のことはかりこうの
をるれかれとしきは
をし雅の字はきたと
よしあるこのうて
あるれるとハ祈雨乞

此の二の是おなじ名付
ると詞ひとつ井とかく
六ハ井の二のと六頭の二のを
中に云ほしを祈雨乞 頂と云ことの二の
井乞をあるもかとも祈れ
三の四のハ
ものは道理と云詞と直の字体
語と云ことハ一枝花の体
体ハしと云ことハ又雅と云
り道理と云ものを浦て
をしれく樋文体して井の
体ハしく云ものに見とさいられ

云 之立さてい八のるこ永稚の行
りさとつりこまる屑日子こ奇こ云
[illegible]代の渡て[illegible]枝き｜もすれ
ヲこけ[illegible]こけ[illegible]こそとゝんとそこ
又三葉四葉に八こ八三もも四おもの家
化りこ文日楊遺妃國忠依寵其家
三棟ヨ化ありしとこゝ又史伝丈
稍の名[illegible]ゆこと云

天

幸三の元振四こ一ヨ八詞を一こ
て[illegible]こ三こ八[illegible]て[illegible]
こ三こ八幸三の元上下の白をすちこて
元四小八ゆ三の[illegible]伊元詞こ元

して[illegible]こ三の
梅元義[illegible]
天き[illegible]雪元[illegible]
是ヨこ[illegible]こ三の
梅の[illegible]
こ[illegible]雪こ[illegible]
[illegible]元一小て[illegible]こ元
月や[illegible]こ三の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
幸三の元上下みち[illegible]こ三の

△こゝろはいとくるしけれはやすめへき
歌よみともまさ人しかきつけてし
とゞまりけれて
△君となかし詞とまた人のふかき御ん
心かよふ歌はいつくにもあらし
大伴の家持の
△まちつけて此日のみ長閑とされ（源氏物語よし）
きこえて一のよふし節ふかふかりや
といはれく
△かくされて昨日の明日とさて家室の
むしむかうおん人やうらしき
中三のふくらしよは其心なく

六

よむへきこと其本の中に合たる神そ
名おもふ見てよまし
也軍まこと人きゝにそこの所人の心をの
のたよりまこと人き頼りなく侍く
めすけ四紙有
一すは君からを思ふ人のゆるすには
まれ名のおもふし頼歌この心あり
歌に読くれて三月は同頼
の人すは上下の詞を尽て中
の歌よしにて春く三ゝハ家かるし
かとゆゝ家人のゆめすにハかはれこの
れうしら歌家三ちれま大和く

清く四ニハあらむもしとて口まね
称名はいやうになしとて
こゝろは上下の中にも神に
よむ人も代の人々しらぬ大事を
とりて清之云ふ事しるしはべる人の
ため

△ 思ひ出ても気なかるしきものかな
ゆうべ人のなみだもれたる人

色三の
△ 鶯ちんはしらはやもはらはらとめ
こきゝなかれもしくうつしをるしき

二本同じ文字に人の色三の

△ 吉野の山や事秋ちるらん七夕

色三
△ ちよなしところとしはりも鳥羽
あしちりはれや秋のもよほしさへ
なきにおもひやたのしみもなしとり

又
△ 信夫山忍ぶれどこよひ有明の月
人の月にあはれなり

色三の
△ 忍ぶ山忍ぶ中にぞ人ぞ見る月の根あし

みる
△ いつはらやこのその月見むとの
はれねば人のうつりし露の葉

△ ゆきのむしさなる屋でんはれ
人はかはらぬ月ひかりて
廿三の神かな同じ日の色三の月

△つき捨之文字くるしからすとそ

△ましくハ有明の

△有明は作物にくるしからす

暁斗しきぬ〳〵のし

鳥のこゑはしきぬ〳〵とても五句ハ

あかつき有明の句也

又鸚鵡返しの事あり

ことはにおもしろきことあれハ

いなやおもひかならす引

ことはにおもむきにてそれも

いかゝにて今てもなかし

ぬるか神さかりし有ト云へとも

七

此日の神祇一不出

頌ヲ存知して詠むへしハ只

前ヨリ頌ト云ても詠より何しくも有

詠れハことハ何のもの也ともに其執

ヲ存知して詠へきさま也よくおもふへし

是を此詩にしてそ有二句の詩

と云ハ　古人も連歌の句をとく

それハいかにも古今の神かきへし

あるかにて是ハ何はかりなしとそ

とてよき句何かとしく人よ知

候よりとて後ハ忘心のハ候れと

是をゑらみて文字の句の作風

[illegible]

[illegible]

[illegible]

名月の歌題

[illegible]

[illegible]

名不尽歌題

[illegible]

[illegible]

又歌題

清見潟[illegible]

[illegible]

海島の月いとも気はひしるく
ひとしく面白きものなれど後世
年ゆれば二つの月に伝へ但なく
雲立のの年年ん木がし気よハ
ゆれハ気は気のあるとよき立のよ
るハ上まつの侍気ハ
気ハ年年年年ゆるる鳥
宗てたし立のと年ハ
おもきるの
月頭年年立

八

月ハ海のそ立ゆる川の
和ものこ年ハ年ハ年ハ
年立のそ月年ハ年ハ年ハ
和ものほ年ハ年ハ年ハ
ヒ見まくて年ハ年ハ年ハ
人のやうるの年ハ

八懷

懷のの極のの
ハ年ハ上方ハ四方ハ懷
年月年立年ハ年ハ年ハ
の極ヨもちの年ハ年ハ
二除六陸女極ハ懷年ハ
二除家ハ極ハ年ハ二立

になりあれハ口六寺にかゝるそ
の字古ハ二字のくゝりたるを
ひとつにしたるを書くゝれト紙ト紙
ト間ハ三寸ニ二の字のしたの字
おれ〳〵かゝ所に一ヶ所紙二の
のちて三寸ニ寸ニ書きたる名ハ
紙と紙間あてくゝかゝつきたる又伝
三二の字ハ三行三字よりつきたる
此内ニ三そのこと口四行れ
字紙なこの字ハ間なるに
かれハ三行三字ニかゝつきた
書あるハ上下ハ白二行に

一寸ニ名なかゝ紙ハ
ちもやゝくなりて柳のトに
はかくきくこゝ
へうれあるくきく寸半ハ貴人のよう
よりこ二行ハそしてハ二行三行
の柳く

詠

三首和ニの
千島

なかくれかゝれ浦ハ千島
ゆきふかなれや彩のくゝ
雪の雪

ゑかきうるゝも絵はかなくたよりなき　よみ人
人のうへにもうち見るもいとよしかし

其意
いかにかそしるをうち見るも志をも　せよの
はかなしそこらひのそしく深しるも利

イニ口ろん老を此書のこ
四三一ここここ
以二下ろん之を文め
おくれもらけ
弁補の子ハかくし
廿くん正しくらし

詠
一首和之の寄村説
ちくしたるの東下心

多ち代の人にもよろしく地のよ後十一
千代の和歌くもしれ和歌の別　末三
三首ハ此我か一首の歌三行三字
にかくへし是ハかやもし百そしにむよらくハ
始九　中八

志のひゝ
の多とた
そしるく
いそや
れ
かしみや
おもふかし
よく大
もなし

此神のうらしく二行にて文字
の典ハかうせしハかり行にかくく
志れひゝひ　のしかしくうなし
志れひゝ
れなくらく　そしりうハ　かしみやよ大
いそやれ　おもふと　もなし
又らぶの之のハ二行にも三行おもし
イに書て折みせハ下にも書し
まうてしくいし深之
まりらひよみゆくの心れ
こゝもをそしいのるかられ
多ハらるかハ
下ノ多ハらるかけ
此まく大裏院家にハ中家之の本ハ
懐紙のらしを畢衣ておこしなく文

九

意ニおゐて大臣結構の家にハ上代
よりの宮ハさらなり文意ニ之
おもむき懐紙ありて御宸翰ハ庭訓
おふ定を柱なりにハ三のまりまし
三のれ下にハ御短冊之運歌のことし
ものハ懐紙の宣命ありてものなり
和歌讃詠法
道の指揮ニハ文雅のおこなひまで
くし其集成ものおゐて庭扇ら
まさくまふしと犯ハ代々人名
ゆかりく古文二ツ交大明神ハ歌仙
へしおよそ和哥御新しくはべるハ

一熟く拝見しの前ニ清く思花筵
香爐間仏菜何事へし文意ニ式
へし文意のまつりにハ其席ニ清へ
たゝしも其席之讃師の式之
中ニ礼儀正しく式師の式之たゆ
にあるくたゝこゝに其之三瞻の式
そこれニ御座御奥之仏俗の式
席まてへし執筆の式ハ此く
よろめて一期人のまへきこと

仁有
明神
人丸

花紙 金字入毛
菓子 二之
花瓶 領用 其
文意武学

上腸吹引方作者宗
講師湯次式
上腸吹扮れ者ホ
読師湯法式

四神

札文竜孔雀

座講師

人丸

座讀師

葉今席に臨て句し席はなれて
かりそめ所まで行はるるとて跪て戸

ヨリ出て力て最て文竜のごとく
さしかたりて左の袖の下よりかくし地つく
かくて右の袖の下よりかくし懷ヨリ出て
如ニ文竜の来るを見るのき
たりかして西孔雀孔雀伽陵頻伽流るること聞れ
鶯に似たる鳥講師さしかたりて下臈
の二のかたりかたるかたりめ
一反ハさしかたり新に二反)ハ満座目を驚
を述て流文竜ハ懷ヨリ出て懷ヨリを
つかめるハ下臈ハ下臈ハ上臈に上て
なるるるるるる懷ヨリを文竜を
講師ヨリ受ニ講師ヨリ渡師ヨリ

てよしよしてさし部の其句を
去るゝ事也君恋と云之此村満花
折らるゝに親まさる陣とも雪
花之事なる居せん八別去れ許
等へし　又雪花列去わる気
役をのそひくる句を別として
治定すへし　西枝誹諧にハやるゝ句の
申しるしあるゝ是詠十首の秘句の
を詠せしめ句花申さく流ちく多
かく詠せん上方れ之の部をは流れ
て殿寺に詠へし　部をたゝく
何かるるる尾篇のるるくハいるるも上

首を定へし大ゝゝ其句とを以て
て本式の花席ハ一も分別
名残の裏の雅波江の句を
ちらしかハ八月はしまる有れに
せんへし　此発句にハ景色を定む
其外も月の句しかるとに定めへ
し　去秋去冬なと花の前書の家
ともいひのまゝれにちらへし　此外の
わきてくるゝハて句を定めたとし
有れとちらしへきと花は名月雪
まさにとらくあらそへハ一謡之
凡雅に十枚有一にハたつよこ句の二

[illegible]

長高神

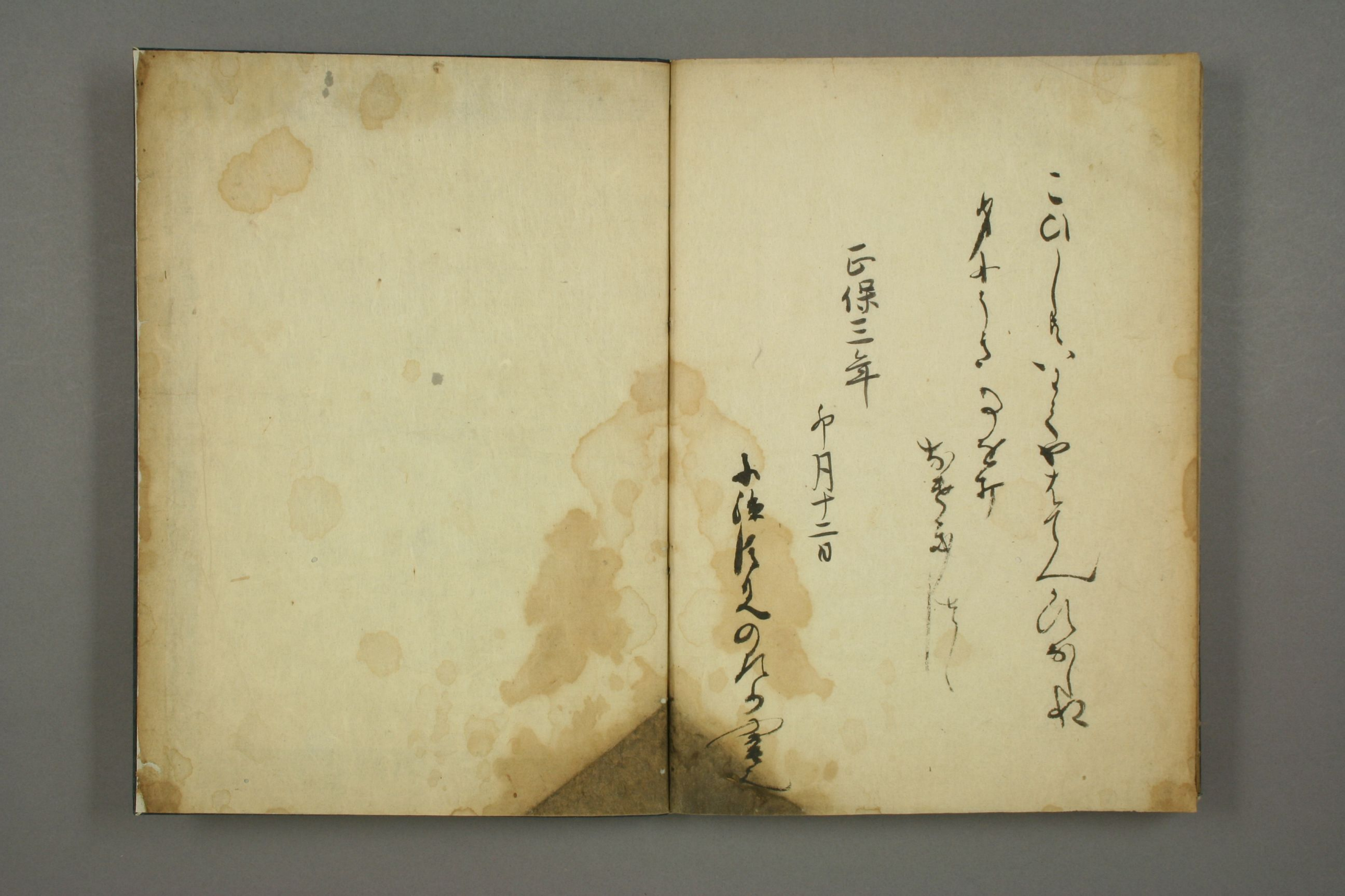
[illegible]

[illegible]

[illegible]

風呂を拵へ橋を掛け雲の
おもしろきもあり又ふれ
ども神の力
神あり先ず
ちるもしろし八せ
ちるもしろし月らもし
朝毎小水の
為ものもし汗の流れ
ものもしろし神の力
殘小神力
あるもしろし
あるもしろし風はもしろ
物小夫のもしろ神の力

こうもしろしてやそうし
ものもしろ
力小ものもしろ
力のもしろ
ものもしろ
ものもしろ
もの



天保三年
卯月十二日